

一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸
2025年度 第3回 学生交流委員会
議事次第

日 時：2025年11月21日（金）持ち回り開催

回答期限：2025年11月28日（金）正午

委員校：神戸常盤大学（委員長校）、神戸学院大学（副委員長校）

芦屋大学、大手前大学、大手前短期大学、関西国際大学、関西学院大学、
関西学院短期大学、甲南大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、
神戸国際大学、神戸市看護大学、神戸松蔭大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、
神戸女子短期大学、神戸親和大学、園田学園大学、姫路大学、兵庫大学、
兵庫大学短期大学部、兵庫県立大学、流通科学大学

計 25 大学

I. 協議事項

1. 2025年度教育連携委員会自己評価（案）について (資料1)
標記に関し、森理事長から各事業委員会に、資料1-1のとおり依頼があった。資料1-2の「2025年度学生交流委員会自己評価（案）」について審議。

II. 報告事項

1. 全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムについて (資料2)
標記に関し、2025年8月30日（土）、31日（日）に神戸学院大学にて開催し、461名が参加。各プログラムの詳細は、資料2の「第22回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム 報告書」のとおり。
2. 兵庫県（ひょうご安全の日推進県民会議）委託事業 (資料3)
若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」について
「阪神・淡路大震災の教訓を次世代にどう繋いでいくか」をテーマに、2024年度からプロジェクトチームが始動、2026年10月23日に活動に基づいた記事を作成・国内外へ広報し、活動を実施。
詳細は資料3-1、3-2の若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」実施報告書、タブロイド版完成品のとおり。
3. テーマ型の学生交流プロジェクト「WILL BE プロジェクト」 (資料4)
「シン キッズフェスティバル」について
大学コンソーシアムひょうご神戸と、賛助会員企業である大栄環境(株)がクラブ経営するINAC神戸レオネッサとの共催イベントを、ノエビアスタジアム神戸にて実施。幼児教育やスポーツ分野を志す学生が中心となり、幅広い年齢層を対象としたブースを企画・運営。学生スタッフ等83名、来場者417名、合計500名の参加があった。詳細は資料4シンキッズフェスティバルチラシ・報告書のとおり。

III. 連絡・調整事項

1. 2025 年度の学生交流委員会の開催予定と主な議題について

第 4 回委員会（2026 年 2 月）：2026 年度事業計画・予算（案）について

第 5 回委員会（2026 年 3 月）：2025 年度事業報告・決算（案）について

以上

<資料一覧>

【審議事項 1】 資料 1-1：事業委員会における 2025 年度事業の実施内容（結果）と自己評価の作成について（依頼）

【審議事項 1】 資料 1-2：2025 年度 学生交流委員会事業 自己評価（案）

【報告事項 1】 資料 2：第 22 回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム 報告書

【報告事項 2】 資料 3-1：若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」実施報告書

【報告事項 2】 資料 3-2：若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」タブロイド版完成品

【報告事項 3】 資料 4：シンキッズフェスティバルチラシ・報告書

2025年11月吉日

一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸
事業委員会 委員長 各位

一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸
理事長 森 康俊

事業委員会における2025年度事業の実施内容（結果）と自己評価の作成について（依頼）

拝啓 晩秋の候、ますますご清祥のこととお慶び申しあげます。平素は当コンソーシアムの活動に深いご理解とご支援を賜り、厚く御礼申しあげます。

さて、当コンソーシアムでは、各事業委員会にて実施いただきました事業について「自己評価」を作成していただき、その内容をもとに企画運営委員会及び理事会にて事業の継続・改善等を検討することとしております。

つきましては、当コンソーシアムの活動の更なる充実のため、ご協力いただきますようよろしくお願ひいたします。

敬具

記

1. 各事業委員会への依頼内容と提出期限について

依頼内容：2025年度事業の実施内容（結果）と自己評価の作成、提出

2025年度事業計画（添付1）に基づき、プログラムごとに実施内容（結果）と自己評価を作成してください。12月以降に実施予定のプログラムについては、進捗状況を具体的に記入ください。

提出期限：12月4日（木）正午

2. 今後のスケジュール

- (1) ひょうご産官学連携協議会の構成員である兵庫県及び経済団体（兵庫県商工会連合会、兵庫県中小企業家同友会、兵庫県中小企業団体中央会）の意見聴取：12月
- (2) 第9回企画運営委員会による事業改善提案の検討：12月
- (3) 第7回理事会による事業改善提案の審議：1月
- (4) 各事業委員会へのフィードバックと2026年度事業計画・予算提出依頼：1月
- (5) 第11回企画運営委員会にて2026年度事業計画・予算検討：2月
- (6) 第8回理事会による2026年度事業計画・予算審議：3月
- (7) ひょうご産官学連携協議会にて、2026年度事業計画・予算審議：3月

（添付書類）

- ・添付1 2025年度 事業計画（事業委員会別）

以上

【問い合わせ先】大学コンソーシアムひょうご神戸事務局（担当：田頭・松岡）
電話：078-271-0233 メール：kanri@consortium-hyogo.jp

【2025年度 学生交流委員会 事業計画】

○目的

年間を通し各委員会校からの提案を協議し、大小問わず、魅力的、そして学生が地元地域への理解を深め、魅力を感じることができるプログラムを予算範囲内で可能な限り実施し、学生交流を活性化させることを目的とする。

○委員校

(全：25校)

委員長校：神戸常盤大学、副委員長校：神戸学院大学

委員校：芦屋大学、大手前大学、大手前短期大学、関西国際大学、関西学院大学、関西学院短期大学、甲南大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、神戸国際大学、神戸市看護大学、神戸松蔭大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、神戸女子短期大学、神戸親和大学、園田学園大学、姫路大学、兵庫大学、兵庫大学短期大学部、兵庫県立大学、流通科学大学

○中長期計画Ⅱ期の取組課題/達成目標/活動指標/予算等

課題及び期待される効果	取組	達成目標	活動指標	予算（千円）
課題③ 大学の枠を超えた学生間の交流・活動促進 他大学の学生との交流、社会人との交流等の場を提供することによる効果 1. 学生が地域・企業との連携・協働を通じた様々な社会貢献活動に、地元企業や自大学以外の学生と一緒に参加することで地域の魅力、または課題を直に感じ、理解を深め、そして解決策を自発的に考える効果が期待できる。 2. 参加した学生に様々な交流、広報活動を促すことにより、学生自らが他大学の学生と協働し、企画を実現することで主体性・実行力・発信力が向上する。また学生がメディア等を活用した周知に取り組むことで、自主性や文章構成力等を高めることを目的とする。併せてコンソの認知度を高める。 上記2つの取組により、コンソ加盟校の学生において本事業での経験が大学4年間の生活の充実に資する効果が期待できる。	1. テーマ型の学生交流プロジェクトの実施 1. テーマ型の学生交流プロジェクト「WILL BEプロジェクト」キッズフェスティバル 2. 加盟校・学生の地域活性化に関わる取組広報の実施 2-1. 学生発信プランディング 「加盟校・学生の地域活性化に関わる取組広報」 2-2. 学生発信プランディング 若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」SNS等での情報発信	各年参加者数 50名以上	参加加盟校数 10校/年	1,050
		情報公開数 200取組以上	各加盟校からの情報 提供：年1回以上 情報公開数：40取組以上/年	200
		参加加盟校数 10校以上/年	個人参加 15名以上	5,769 (受託事業収入)

<2025年度 学生交流委員会 事業計画 (③取組1)>テーマ型の学生交流プロジェクト「WILL BEプロジェクト」キッズフェスティバル

計画 (4月記載)	自己評価 (12月記載)	報告 (3月記載)								
<p><「シン キッズフェス[仮称]」の開催></p> <p>開催日：9月、又は10月のINAC神戸ホームゲーム開催日。 時間：未定（キックオフの2~3時間前から試合終了または終了1時間後まで） 場所：ノエビアスタジアム神戸（多目的芝生広場含む） 対象：未就学児童等とその家族、試合観戦者</p> <p><目的></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会との交流： 学生が地域の子供や家族と交流する機会を提供し、地域社会との結びつきを強化する。 ・健康促進： スポーツや文化活動を通じて子供たちの健康と体力を向上させる。 ・コミュニティの一体感を醸成： 試合とフェスを通じて、地域社会全体が一体となって楽しむ場を提供（体験）する。 ・実践的な経験： キッズフェスティバルの企画・運営を通じて、実際の試合運営に関するスキルを身につけ、学生が将来のキャリアに役立つ経験をしりーダシップ力を養う。 <p><内容></p> <p>当プログラムでは、INAC神戸レオネッサのホームゲーム自体を「キッズフェスティバル」のプログラムの1つとして位置付け、学生達が企画・運営に主体的に関わる取組とする。コンソは加盟校からイベントブースに出席する学生団体等とプログラム全体を企画運営する学生を広く募集する。プログラム全体の企画運営学生に関しては、「キッズフェスティバルを成功させたためにはどうしたら良いか?」といった観点から、複数の班に分かれて活動を実施する。これらの活動の取り纏めは、INAC神戸のスタッフに依頼する。</p> <p>[活動班例(案)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イベント全体の調整班 ・企画班 ・INAC神戸レオネッサのホームゲーム運営サポート班 ・広報・SNS班 ・その他 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施コストに関して INAC神戸レオネッサは、当プログラムにおいて、施設使用料等を原則徴収しない。 コンソ事業予算内で実施する。 	<p>■「シン キッズフェスティバル」の開催</p> <p><活動内容></p> <p>INAC神戸レオネッサと共に事業として実施。スポーツプロモーターを目指す学生が、イベント企画・運営・広報全般やスポーツビジネス体験の後、「シン キッズフェスティバル」を実施した。</p> <p>開催日：2025年10月13日（月・祝）INAC神戸ホームゲーム開催日 時間：12:00~15:00 場所：ノエビアスタジアム神戸（多目的芝生広場・ときわんノエスタ） 対象：未就学児童等とその家族、試合観戦者</p> <p>活動分類：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・a:スポーツプロモーター（企画運営班）活動 参加学生数：9校15名 ・b:キッズサポート（ブース出展班）活動 出展ブース数：13校15ブース（参加学生65名） <p>1. イベント企画・運営会議、広報、スポーツビジネス体験 (a)</p> <p>活動日：7月18日、7月19日、8月7日、8月23日、8月27日、9月6日、9月16日、9月21日、9月25日、9月30日、10月6日、10月7日 参加者：のべ75名（内訳：参加学生数56、職員数12、企業7）</p> <p>2. シンキッズフェスティバル開催日（10月13日用）</p> <p>参加者総数：500名（①スタッフ(a+b+企業、一般協力者)+②来場者） 参加者内訳：</p> <p>①スタッフ合計83名 (スタッフ内訳) 参加学生・職員・企業・一般・INAC・コンソ ・参加学生：14校65名（内訳・関西学院大学9、大手前大学2、大手前短期大学1、関西国際大学7、神戸大学、神戸国際大学1、兵庫県立大学3、神戸常盤大学1、神戸学院大学12、神戸市外国语大学5、流通科学大学4、甲南女子大学4、兵庫大学13、加盟校外大学2） ・職員：7名（内訳・神戸学院大学2、流通科学大学1、甲南女子大学1、神戸市外国语大学1、兵庫大学1、神戸常盤大学1） ・企業：9名・一般：2名</p> <p>②来場者合計417名（内訳・大人220名・子供197名）</p> <p><自己評価></p> <p>スポーツプロモーターは、7月中旬から活動を開始し、月数回のミーティングや試合会場への同行を通じてINAC神戸レオネッサの運営に参加した。この活動を通じて、スポーツビジネスやイベント企画について学ぶとともに、他大学の学生との交流を深めることができた。キッズサポートは、ゼミやサークル単位でブースを企画・準備し、当日の運営を担当する中で、来場者に楽しんでもらえる内容を工夫し実践する力を養った。フェスティバル当日は受付や試合設営、ブース運営など多様な役割を担い、イベント全体の円滑な進行と参加者満足度の向上に貢献した。また、企業課題解決プログラムと連携したブース運営を通じて、学んだ知識を実践に活かす経験も得ることができた。今回の活動を通じて、主体的に企画立案や運営に取り組む力を高め、チームでの協働や課題解決能力の向上に寄与したと評価している。今後は学生募集の時期や準備期間の調整を行い、より主体的な企画・運営が可能な体制を整えつつ、学生のスポーツビジネス体験と企業課題解決への有効な取組み、地域活性化につながるイベントを継続的に実施する予定である。</p>									
達成目標に対する実績 【達成目標】各年参加者数50名以上	500名/年									
活動指標に対する実績 【活動指標】参加加盟校数10校/年	14校/年									
自己評価基準：対到達目標※	4	—								
自己評価基準：対継続性※	4	—								
事業収支	収入	1,050,000円	支出	496,342円	収支	553,658円	支出		収支	
理事会からの改善提案（次年度事業計画に反映）										
※自己評価基準：対到達目標	4 : 初期計画を上回って達成 3 : 初期計画を達成 2 : 初期計画をやや下回った 1 : 初期計画を下回った	※自己評価基準：対継続性			4 : 本プログラムは継続すべき 3 : 本プログラムは継続しても良い 2 : 本プログラムの継続には改善が必要 1 : 本プログラムは中止すべき					

【2025年度 学生交流委員会 事業計画（③取組2-1）】学生発信プランディング「加盟校・学生の地域活性化に関する取組広報」

計画（4月記載）	自己評価（12月記載）	報告（3月記載）
<p>【地域の活性化に関する加盟校学生の取組事例の紹介】</p> <p>大学コンソーシアムひょうご神戸のホームページに、加盟校の学生が地域の活性化に関する取組事例を公開する。また必要に応じて、様々なメディア等への告知を検討・計画する。</p> <p>（内容）</p> <p>加盟校からの情報提供をもとに、地域で若者が活躍する姿を周知することにより、加盟校による地域の活性化のための貢献活動に取り組む。</p>	<p>■地域の活性化に関する加盟校学生の取組事例の紹介</p> <p>大学コンソーシアムひょうご神戸のホームページやパネル展示で、加盟校の学生が地域の活性化に関する取組事例を公開した。</p> <p>＜活動内容＞</p> <p>①「全国コンソーシアム研究交流フォーラムパネル展示」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月30日（土）12:00～19:30（コアタイム15:10～16:30） ・テーマ「兵庫から発信する大学間連携や産官学連携」 ・【A,B】大学間・産官学連携（ブース展示11校、ポスター展示1校） ・【C】「震災30年」阪神・淡路大震災の教訓をつなぐ、 大学の活動について（ブース展示9校1団体、ポスター展示1校） ・全展示数：22取組 ・全参加者数：11校、学生17名、教職員32名 <p>②地域の活性化に関する加盟校学生の取組事例の紹介</p> <p>加盟校からの情報提供をもとに、大学コンソーシアムひょうご神戸HP上から、リンクされた「note」に「地域で輝く学生」と題した読み物記事の連載を行った。通年で、地域で学生が活躍する姿を広く周知した。</p> <p>【掲載実績】2校11取組</p> <p>＜自己評価＞</p> <p>「全国コンソーシアム研究交流フォーラム」では、大学間・産官学連携や震災30年に纏わる加盟校の取組事例を広く発信。同時に展示することで、各加盟校の強みや特徴が明確化し、多様な活動を加盟校、加盟校外、企業、行政の方々へより合理的に共有する機会をつくることができた。その他「note」の連載も含め、情報公開数の目標達成に向けた取組は着実に進行しており、今後も多様な方法で継続的な発信を通じて、加盟校の地域との連携を促進する。</p>	

達成目標に対する実績 【達成目標】情報公開数200取組以上/5年	165取組/4年（10月31日現在）				
活動指標に対する実績 【活動指標】各加盟校からの情報提供：年1回以上 情報公開数：40取組以上/年	32取組（10月31日現在）				
自己評価基準：対到達目標※	3	—			
自己評価基準：対継続性※	3	—			
事業収支	収入 200,000円	支出 45,928円	収支 154,072円	支出	収支

理事会からの改善提案（次年度事業計画に反映）

※自己評価基準：対到達目標	4：当初計画を上回って達成 3：当初計画を達成 2：当初計画をやや下回った 1：当初計画を下回った	※自己評価基準：対継続性	4：本プログラムは継続すべき 3：本プログラムは継続しても良い 2：本プログラムの継続には改善が必要 1：本プログラムは中止すべき
---------------	--	--------------	--

【2025年度】学生交流委員会 事業計画 (③取組2-2) 学生発信プランディング 若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」SNS等での情報発信

理事会からの改善提案（次年度事業計画に反映）

第22回 全国大学コンソーシアム 研究交流フォーラム 報告書

2025.8.30(土)-31(日)

兵庫県開催

会場：神戸学院大学 ポートアイランド第1キャンパス



大学コンソーシアムひょうご神戸枠 計331名

- | | |
|------------------|---------------|
| ・加盟校の教職員 24校146名 | ・自治体 10自治体27名 |
| ・加盟校学生 12大学74名 | ・一般 8名 |
| ・企業 33社59名 | ・コンソ職員 17名 |

5

分科会

学生の活躍

他エリアからの参加 計130名

- | | | |
|------------|---------|-----------|
| ・大学教職員 79名 | ・企業 12名 | ・コンソ職員23名 |
| ・学生 10名 | ・自治体6名 | |

参加者合計 461名

- | | |
|--------------|-----------------|
| ・シンポジウム 334名 | ・SDワークショップ 58名 |
| ・情報交換会 241名 | ・「ライフローニングキャリア」 |
| ・分科会 131名 | ・共創セッション 52名 |

共催

全国大学コンソーシアム協議会、
一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸

協力

神戸学院大学(会場校)

後援

文部科学省 / 一般社団法人国立大学協会 / 一般社団法人公立大学協会 /
一般社団法人日本私立大学連盟 / 日本私立大学協会 / 全国公立短期大学協会 /
日本私立短期大学協会 / 全国知事会 / 朝日新聞社 / 毎日新聞社 / 読売新聞社 /
日本経済新聞社 大阪本社 / 一般社団法人共同通信社 / 兵庫県 / 神戸市 /
神戸新聞社 / 神戸商工会議所 / 一般社団法人兵庫県経営者協会

1

開会挨拶
シンポジウム①

2

情報交換会
シンポジウム②

3

・パネル展示
セッション

4

分科会

5

学生の活躍

テーマ

激変する将来社会を切り拓く 新たな人材の育成にむけて

～不易流行で考える大学間連携と産官学協働～

開会挨拶／シンポジウム①

ご挨拶



大学コンソーシアムひょうご神戸は、2006年に「県下すべての大学によるすべての大学のための」組織として設立され、本年で20年目を迎える。国際性を軸に留学生インターンシップや相談窓口等を継続しており、東日本大震災復興支援や「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」による防災啓発にも取り組む。少子化やAIの進展等、変化の大きい環境下で、人材育成には産学官協働が不可欠であり、教育の本質を守りつつ革新を取り入れる「不易流行」の姿勢が求められる。本フォーラムは、大学間連携の役割を見つめ直し、多様な立場から意見交換を行う機会として開催する。



フォーラム 開会挨拶

兵庫県副知事
服部 洋平 氏

全国大学コンソーシアム協議会
代表幹事 小原 克博 氏
(大学コンソーシアム京都 理事長、
同志社大学 学長)

大学コンソーシアム京都
専務理事、事務局長
小林 慎一 氏(代読)

フォーラム 閉会挨拶

全国大学コンソーシアム協議会
代表幹事 川野 祐二 氏
(エリザベス音楽大学
理事長・学長)



情報交換会 開会挨拶

大学コンソーシアムひょうご神戸
理事 備酒 伸彦 氏

(神戸学院大学 学長)



情報交換会 乾杯挨拶

大学コンソーシアムひょうご神戸
副理事長 藤澤 正人 氏
(神戸大学 学長)



シンポジウム①話題提供

テーマ 大学間連携と地域共創

～社会変革期におけるコンソーシアムの可能性～

濱名理事から冒頭、中教審「知の総和」答申で、大学間連携の必要性が高まっており、大学を「地域課題解決に資する知の拠点」と位置づけ、地方自治体や産業界との連携による共創の場となることが求められているとの説明がありました。

吉見先生からは「人口減少とAI化のなかの大学の未来」というテーマで、AIによる「知の総和」答申の分析の披露から、日本の大学の置かれている危機的状況、教育の質向上が不可欠な状況と、そのために必要な大学改革、文理融合ではない文理複眼教育の姿、リカレント教育の本質化のための高等教育の転換、最後に今後の大学のミッションとして地球人を育成するために、大学と地域のあるべき姿等、多くの示唆に富んだ話題提供がありました。

続いて岡田氏からは、ご自身の事業承継と新たな事業創出における経験を通じた、産学官連携の可能性と課題についてお話をあり、次に島藤氏からは、企業における人材育成の現状紹介と、大学が地域、企業と連携して提供する新たなリカレント教育モデルについて提案がありました。

最後に登壇した本荘氏からは、立ち上げ時から関わってこられた「大学コンソーシアムひょうご神戸」について、いくつかのターニングポイントとご自身の経験を紹介され、コンソーシアムのあるべき姿についてお話をいただきました。

登壇者 日本テクノロジーソリューション株式会社
代表取締役社長 岡田 耕治氏

エクスアールジョン株式会社
代表取締役 島藤 真澄氏

國學院大學 観光まちづくり学部 教授 吉見 俊哉氏
東京大学 名誉教授

関西学院大学
学生活動支援機構事務部 部長 本荘 雅章氏

大学コンソーシアムひょうご神戸
理事(関西国際大学 学長)濱名 篤氏

シンポジウム②・情報交換会

シンポジウム② ディスカッション



まず、質疑応答では、日本の高等教育が欧米キャッチアップ型で形成されてきたことの問題点や、AIへの問題認識とAIの限界についてのお話がありました。さらに、大学教育においては学生が「AIより自分自身の回答が正しい」と思える論争力や経験力の育成が重要であるとの指摘がありました。続いて、自治体・大学・産業界が教育について議論する際には、その地域の未来を見据えたビジョンが必要ではないかとのお話がありました。

その後の意見交換では、市場原理主義の行き着いた結果としての東京一極集中(東京ブラックホール論)に関する話題が提供され、これを中心に議論が進行しました。大学と産業界の連携において、コンソーシアムは、どのようなストーリーを紡ぎ出せるのか、また、どのように大学と産業界との時間軸の違いを仲立ちするのかについての言及がありました。さらに、産業界や自治体と大学を結ぶコンソーシアムについては、主体性をどこに置くのかや、アカデミックとしての価値をコンソーシアムが提供してほしいとの意見が出ました。地域と大学間連携については、持続可能性が重要であり、兵庫県を始め地方にはそういう意味での価値があること、そしてコンソーシアムと企業連携には、地域の共通課題の解決に向けて共創を意識することが重要であることが再確認されました。



「AIとの付き合い方」や「これからの大連携の役割」等、有識者の多様な視点に触れられたことが大きな学びとなったとの声が多く寄せられた。特に、吉見先生による「大学は人生で3度通う場である」という提起や、「学生の潜在力をどう伸ばすか」という問いかけは、大学の存在意義を改めて考える契機となった。また、AIを盲信するのではなく、人間の知とどう共存させるかという視点も印象に残ったとの意見が多く見られた。

さらに、企業経営者から語られた「早い段階でジャンルを決めず、まず挑戦してみる姿勢」「スピード以外の軸で物事をとらえる重要性」等は、学生教育や大学運営にも示唆を与える内容として高く評価された。

そのほか、「産官学が交わり新たな価値を生み出すことの意義」や、「大学間連携の今後の方向性を深く考える機会となった」という声も寄せられ、大学・企業・行政の立場を越えて交流できたこと自体が、今後の活動の糧になるとの感想が目立った。全体を通じて、登壇者の知見や多角的な議論は「参考になった」「自団体の取組に活かしたい」と前向きに受け止められており、シンポジウムは大学の未来と社会との接点を考える有意義な場として高い評価を得た。

1 開会挨拶
シンポジウム①

2 情報交換会
シンポジウム②

3 ポスター・パネル展示
・パネル展示

4 分科会
・

5 学生の活躍

情報交換会



全国から集まった大学・コンソーシアム関係者や企業、地方自治体の皆さまを迎えた立食形式の情報交換会は、鏡開きで華やかに開幕。続いて、灘の酒リブランディングに取り組んでいる神戸学院大学の学生が乾杯用の日本酒を配布し、会場の一体感を高めました。

兵庫に根差した企業によるブース出展等では、地元ならではの料理や飲料が振る舞われ、参加者は味覚を楽しみながら交流を深めました。ポスター・パネル展示や学生司会によるレクリエーションも加わり、和やかな雰囲気の中、交流を深める貴重なひとときとなりました。

様々な気づき、出会いがあり、有意義かつ楽しい場であった。コンソーシアムは大きな可能性があり、大学・企業・自治体が共にどう活用していくかが問われている。地域の持続可能性を確保する上で欠かせないと感じた。

情報交換会では沢山の大学職員、企業の方とお会いし、留学生支援のネットワークを構築できた。



3 ポスターセッション・パネル展示

1日目 ポスターセッション

各大学コンソーシアムが主体となった教育連携や地域貢献の取組を11団体が紹介。大学関係者に加え企業や学生等多くの方が来場し、展示内容をじっくり見学するとともに活発に意見交換や情報共有を行いました。各コンソーシアムの先進的な事例や、創意工夫に富む多様な活動に触れる貴重な機会となりました。

【出展団体】公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益社団法人 ふじのくに地域・大学コンソーシアム、大学コンソーシアム八王子、大学コンソーシアムやまがた、いわて高等教育コンソーシアム、一般社団法人 教育ネットワーク中国、一般社団法人 高等教育コンソーシアム宮崎、公益社団法人 大学コンソーシアム石川、大学コンソーシアム岡山、一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸、特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪

アンケート
から

時間が長く設定されていたので、他エリアのコンソの方々とじっくりお話をすることで、他のコンソの活動方針の多様さ等勉強することができた。連携の可能性も感じられ、大変有意義だった。

多くの大学関係者にこのようなフォーラムに触れて新しい気づきが生まれるよう、私も大学や自分のコンソーシアムに戻って発信する。全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムの価値の高さを社会に向けて発信をお願いしたい。



パネル展示



展示テーマ 兵庫から発信する大学間連携や産官学連携

大学コンソーシアムひょうご神戸に加盟する15校23ブースが「大学間連携」「産官学連携」「震災30年」阪神・淡路大震災の教訓をつなぐ大学の活動についての3テーマにて発信。コアタイムには多くの来場者が足を止め、パネルを読み込みながら議論や質問を交わす姿が見られました。学生も積極的に説明に立ち、参加者の関心を惹きつける姿勢が印象的でした。

※地域活性化に資する人材育成を目指す、学生交流委員会事業として実施。

【出展大学・団体】明石工業高等専門学校、大手前大学、関西国際大学、関西学院大学、甲南大学、神戸大学、神戸学院大学、神戸国際大学、神戸松蔭大学、神戸親和大学、兵庫大学、兵庫教育大学、兵庫県立大学、流通科学大学、一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸

アンケート
から

震災30年を迎えて兵庫県、神戸の大学が災害の学びと啓発活動を続けておらることに感銘を受けた。地震災害は悲劇だが、地域に住まう人々の人的資本の価値を問う試練なのだと感じた。

各大学での取り組みがわかりやすくまとめられていて、地域共創科目やサービスラーニング科目等とても興味深かった。また解説学生の、熱心で丁寧な様子が印象的だった。本学のオープンキャンパス等の発表の場の参考にしたい。



兵庫県からの受託事業

～若者による「震災の教訓をつなぐプロジェクト」～

阪神・淡路大震災から30年。あの日の教訓を次世代へつなぐため、震災を知らない世代の学生たちが、取材や調査を重ね、防災・減災啓発の動画を企画・制作。地域社会や全国に向けて発信しています。



分科会



第1分科会 公益財団法人大学コンソーシアム京都

産官学オール京都での留学生誘致の推進 ～留学生の定着に向けて～

コーディネーターの今西氏より、留学生政策の推移と大学コンソーシアム京都の海外留学派遣プログラムの実績が紹介されました。続いて京都市の上田氏より、京都市の大学、学生数、留学生数等に関する状況と、留学生受け入れに関する施策についてお話をされました。次に龍谷大学の笠森氏より留学生就職支援と留学生の実情について報告があり、その後は、留学生を地域で受け入れるための課題や取り組み策、留学生の就職支援等について質疑応答が行われました。



アンケート
から

総じて、「留学生」と一括りにするのではなく、個々人の文化的な背景や諸事情に配慮した支援が必要であると再確認できた。これは、外国人留学生に限らず、学生支援の観点からも共通する内容である。

当市においては、技能実習生による労働力の確保しかできていないが、高度人材の確保は今後の課題となるので大いに役に立った。



アンケート
から

リカレント教育の鍵はアンーラーニングであり、学生と社会人が共に学び合う場が重要になる。教育を教えることと捉える見方からの脱却が不可欠だと感じた。教育に対しての考え方があつた。

樫原さんの「光合成」というワードが大変しきりきました。また、どこを動かすとどうなるのか。誰がどう思っているのかなど、たいへん参考になった。

第2分科会 一般社団法人高等教育コンソーシアム宮崎

共創で描くリカレント教育の未来

～共に学び・共に地域を創る場をどのようにして構築するか～

コーディネーターの中山氏より、宮崎県内の高等教育機関すべてが参加するCOC+R事業の概要とリカレント教育の現状が紹介されました。続いて宇都宮大学の佐々木先生より、リカレント教育の歴史的背景と再定義、またリカレントとリスキリングの相互補完性等について話題提供がありました。次に全国初の大学等連携推進法人が認定された山梨県立大学の杉山学長補佐より、「地域連携プラットフォーム」が提供する教育プログラムに地域各機関が関与する等の特徴について説明がありました。(株)リンクアンドモチベーションの樫原氏からは、リカレント教育が企業にもたらすメリットと実施の際に留意すべきポイントについてお話をされました。その後、リカレント教育のアウトカム、オンライン教育の活用等のトピックで質疑応答がなされました。

第3分科会

一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸

【TKK3大学連携事業 15周年企画】 阪神・淡路大震災から30年 「若者と考える 被災地支援と語り継ぎのチカラ」

TKK(東北福祉大学、工学院大学、神戸学院大学)3大学連携プロジェクトとして、防災・減災・ボランティアを中心とした社会貢献教育の取り組みが紹介されたのち、TKK3大学に加えて金沢大学、熊本学園大学の5名の学生より、防災・減災・ボランティアに関するそれぞれの活動について発表がありました。その後の意見交換では、学生が防災等の活動へ参加することへの意義や期待、大学が学生の活動をどのように支援できるか、またこれらの活動を学生教育にどのように繋げていくかについて議論されました。



アンケート
から

学生の活動報告内容が、今後の業務・学生支援のため有益であったと思う。

他大学と連携して被災地を支援する仕組みがあること、実際に活動した学生の話を聞けたことが、とてもよかったです。この活動に参加できるよう加盟校に働きかけの動きを取りたい。

1 開会挨拶
シンポジウム①

2 情報交換会
シンポジウム②

3 ポスター・パネル展示
シンポジウム③

4 分科会

5 学生の活躍

5 学生の活躍

学生ステージ



流通科学大学の外国人留学生8名が、
ミャンマー舞踊「ダジャンの踊り」を披露。
ミャンマーのお正月(ダジャン祭)を祝い、清め。
再生・豊穣・喜びを象徴する、華やかで躍動感ある舞が会場を魅了しました！

芦屋大学の外国人留学生2名によるステージでは、まず、中国の伝統楽器「二胡」で「戦場のメリークリスマス」と「茉莉花」が奏でられました。続いて、イスラム教の聖典コーランの詠唱が加わり、重厚で清澄な響きが広がるひとときとなり、参加者は異文化の奥行きを実感しました。

※グローバルな教育支援を目指す、国際交流委員会事業として実施。



学生司会

加盟校の放送部学生6名が会の進行を担いました。シンポジウムでは、緊張しつつも堂々と司会を務め、会場は温かく華やかで雰囲気には包まれました。さらに情報交換会では、進行だけでなくレクリエーションとして「関西弁講座」を企画し、交流の場を盛り上げました。



午前中には、
2プログラムも実施！



大学事務職員のためのSDワークショップ

甲南女子大学との共催にて「大学事務職員のためのSDワークショップ」が開催され、加盟校事務職員や学生ら約40名が参加。このワークショップは甲南女子大学が進める「全員発揮型のリーダーシップ」教育と連携して実施。参加者は自らが直面する業務課題を題材に、学生アクションラーニングコーチの進行のもと、質問中心の対話を通じて課題の本質を探り、解決のための行動計画を立案しました。グループごとのセッション後には全体共有・振り返りが行われ、さらに昼食をとりながらネットワーキングの機会も設けられました。

参加者からは「『質問会議』という新たな課題解決手法を学べた」「目の前の課題の根本的な原因に気づけた」「職員同士で業務の課題について共有し、アドバイスし合える貴重な時間となった」といった声が寄せられ、日々の業務に活かせる気づきと人的ネットワークを得る有意義な機会となりました。



産・官・学でつなぐ「ライフロングキャリア」共創セッション

産官学から約50名が参加し、兵庫県における若者の県外流出と地元定着の課題を背景に、キャリア支援の可能性を探るセッションを開催しました。第1部では、発達障害やグレーゾーンの若者に焦点を当て、多様性採用と支援の在り方を共有し、ニューロダイバーシティの視点から誰もが力を発揮できる社会への理解を促しました。第2部では、キャリアセンターによるリカレント教育の事例を紹介し、卒業後支援と地元定着、地域プランディングへの展開を検討しました。活発な意見交換を通じて産官学の連携機運が高まり、支援モデル構築や雇用環境改善に向けた実践的ヒントが得られました。

参加者からは「発達障害やグレーゾーンへの理解が深まった」「学生のリカレントを考える機会となっただ」「異なる立場の意見交換が有意義だった」との声が寄せられました。

1 開会挨拶
シンポジウム①

2 情報交換会
シンポジウム②

3 ポスター・パネル展示
・パネル展示

4 分科会
・

5 学生の活躍

一般社団法人

大学コンソーシアムひょうご神戸

〒651-0072 兵庫県神戸市中央区脇浜町1丁目2-8 兵庫国際交流会館1F
 ■阪神「岩屋」駅:徒歩3分 ■JR「灘」駅:徒歩6分 ■阪急「王子公園」駅:徒歩10分
 <受付時間>月～金曜 9:00 - 17:00
 ☎078-271-0233 ☎078-271-0244
 ☐info@consortium-hyogo.jp



HP

兵庫県(ひょうご安全の日推進県民会議)委託事業
若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」実施報告書

一般社団法人大学コンソーシアムひょうご神戸

兵庫県委託事業 若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」
リメンバー117 WEB メディアの取材・編集
(委託期間:令和 7 年4月1日～令和7年 10 月31日)

1.目的

阪神・淡路大震災から30年の節目にあたり、震災後に生まれた若者たちが、震災を風化させずに「震災の教訓を次世代にどう繋いでいくか」をテーマにプロジェクトチームを結成し、自らの言葉でWEB配信の記事を作成、発信する。興味や関心のある事象から出発し、当時の被災者、活動家や自治体の職員などへの取材・調査を経て、防災・減災につなげていく。語り合い、学びや想いを自らの言葉で綴り記事を作成、WEB配信やタブロイド紙発行を通して、地域社会や国内外へ広報活動を行う。

昨年度の成果、若者による防災啓発動画については、全国大学コンソーシアムのフォーラムや大阪・関西万博、ひょうごExpo week のイベントで上映し、国内外に広く震災の教訓や想いを伝え防災・減災意識の醸成を図る。

2.概要

(1) リメンバー117 WEB メディアの取材編集（若い世代の言葉で震災・防災を語る）

30年前の被災時には、「自身と同じ境遇の人や障がい者はどう行動したのか」「当たり前ではない状況でどう対応していくか」など、メンバー各々が被災者や活動家、自治体職員等に取材を行い、自らの言葉で原稿文章を作成した。専門員の指導やデザイナーの協力を得て記事を完成させ、記事はリメンバー117のwebサイトに掲載。また、8名の記事をタブロイド紙にまとめ、9月に大阪・関西万博会場や創造的復興サミット会場にて配布し、一般者への広報を行った。

(2) 昨年度制作の防災啓発動画(防災動画)

今年度 広報活動に努め、兵庫県のひょうごチャンネルや大学コンソーシアムひょうご神戸のホームページ、また、8月の全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム(震災30年パネル展示や分科会)、大阪・関西万博会場、ひょうごExpo week 創造的復興サミットでも上映され、制作した若者の繋ぐ想いや教訓を国内外に伝えた。次世代に向けたこの取組みや内容について、多くの方から共感を頂けた。

3.参加者

参加者募集にあたっては、令和6年12月から兵庫県のホームページでの案内(コンセプト、募集要項)に合わせて、当コンソにおいては、加盟校(学生交流事業)への直接の案内のほか、ホームページにも掲載し広く参加者を募った。防災・減災に関心のある18～25歳の個人(県下の社会人、学生)を対象とし、以下の大学生(当時)から応募参加があった。

- ・大学生 4 校12名 (2025年2月14日までの応募者は 14 名、内2名はその後辞退)
(内訳) 兵庫県立大学(7)、関西学院大学(3)、神戸松蔭大学(1)、神戸常盤大学(1)
- ・兵庫県 総務部広報広聴課 5名(広報プロデューサー、メディアディレクター、サポーター)
危機管理部防災支援課 2名
- ・大学コンソ事務 2名

4. 実施内容(体制・運営)

- (1) リメンバー117プロジェクトチームの運営 …総務部広報広聴課、危機管理部がリードし、当コンソはプロジェクトチームの運営事務支援や震災30年の若者による防災啓発動画の広報活動などを積極的に行なった。
- (2) 編集会議(ワークショップ)の企画・運営
参加学生の意識を合わせるとともに、広報活動の企画・検討するためのワークショップを月1～2回開催。プロデューサーやディレクターによるコンテンツ(ターゲット)の方向づけや文章校正が行われた。また、震災当時の被災者や音楽活動家、自治体、店舗、農家の人々等へのインタビュー取材*を計画した。 *自らの意見や考えをまとめて語りかける対談形式
また、メンバー間では、コミュニケーションツールSlackを利用し、メンバー間の進捗や情報の共有を図った。
- (3) ウェブサイト、SNS 等での情報発信
参加学生が作成する記事コンテンツを兵庫県が運営・管理するウェブサイト(リメンバー117)およびSNSで発信した。
- (4) 防災・減災啓発動画の効果的な発信(兵庫県危機管理部、当コンソ)
昨年度、学生11名が制作した防災啓発動画を広く国内外へ発信するための機会を設け、効果的な広報発信を行なった。You Tube配信 ひょうごチャンネル、大学コンソーシアムひょうご神戸のHP(学生交流)、第22回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム(8月30,31日 神戸学院大学にて開催)の他、大阪・関西万博など幅広い世代が参加する公共性の高いイベントへの広報活動を行なった。

5. チーム リメンバー117の活動

【事業概要】

2月27日のキックオフ会議では、初めに兵庫県の震災30年事業、若者による「震災の教訓を繋ぐプロジェクト」の背景や意義が防災支援課より説明された。次いで広報広聴課より、以下の方針や進め方が説明された。

【プロジェクト方針】

震災30年事業の5つのコンセプト(忘れない・伝える・活かす・備える・繋ぐ)に沿って、WEBメディアへ自らの言葉で発信する。

【進め方】

- ① 自由に意見する。最近の関心・興味、感動したこと、疑問に思ったことから考え始めて防災につなげていく。
- ② 各自分が伝道師、それぞれが考えたことを伝える伝道師になる。
- ③ 何を感じたか、思ったのかを自身の言葉で伝える。学校で色々と学んでいると思うが、個人が何を感じたかを軸に活動してほしい。こういう企画を考えてみた、取材してみたいなどの意見や提案を自由に行なう。これらを広報広聴課(専門員)がサポート・指導し、メンバーのコンテンツを創作していく。

【進行フロー】

- 「企画」→「取材」→「コンテンツ作り」→ WEBにアップするフローで、リメンバー117(<https://tsunagul117.jp/remember117/>)サイトに、震災25年時の記事に追加して30年の記事を追加していく。
- ・SNS投稿は、県のSNSアカウントがあり、学生がディレクターに投稿の仕方を教えてもらい発信する。
 - ・コンテンツはタブロイド(フリーペーパー)に纏めて、大阪・関西万博会場などで配布する。



キックオフ会議(2/27)



方針説明

(1)編集会議（月1～2回の実施、於:兵庫県庁2号館）

	月日	参加者	内容(話し合い)
第1回	2月27日 キックオフ	8名	(JA共済連兵庫からの寄附目録受領と感謝状贈呈式の後) ・震災30年事業、本プロジェクト概要、方針説明 及び 自己紹介と個人の興味・関心事の紹介し交流 ・事務連絡(今後の開催要領、Slack 立上げ、交通費申請など)
第2回	3月10日	8名 (2) (web 参加、内数)	・各メンバーの出発点(興味関心事)や方向性などを議論 ・広報広聴課より Slack の使用方法の説明(4チャンネル)
第3回	3月24日	7名 (2)	・メンバー毎に方向性や取材先候補などをプロデューサー(P) やディレクター(D)からのアドバイスを交え自由に意見交換 ・交通費申請方法(様式、締切など)について通知し徹底
第4回	4月 7日	3名 (1)	・「小学校2年時の経験(転校生)」(生子)テーマ文章の校正 ・「震災時に大怪我していた人」(山崎)へのアンケート実施検討 ・「祖父母(視覚障がい者)について」(楠本)に対して、P,D から 感想やアドバイス、コンテンツ作りに向けた取材計画を議論 ・取材時の名刺(デザイン)が完成し、当日参加者に配付
第5回	4月21日	4名 (1)	・「家族の美味しいごはん」(朝原)、「ボランティアとバイトの違 い」(野路)、「小学校2年時の転校生」の文章やスケッチにつ いて議論。取材段取り、転校生テーマはタイトル付けとバナーデ ザインを進める。 ・「合唱コンクール」(金原)は書き始めと方向性をアドバイスさ れる。
第6回	5月12日	4名 (2)	・被災時に負傷中(大怪我)だった、就職活動中だった人の体験 談を SNS で募集(投稿)する。 ・祖父母(視覚障がい者)に関する記事は、自治体(危機管理、 地域福祉課)へのインタビューを計画、インタビューの心構え がアドバイスされる。

第7回	5月26日	6名 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・1テーマ(転校生)の文章とタイトルが決定 (生子) ・3テーマのインタビュー取材を6月に実施決定 (6/9 野路×県庁職員、6/12 楠本×たつの市役所所員 6/25 山崎×東播磨県民局 副県民局長) ・広報 SNS は完成次第、順次配信。タブロイドは創造的復興サミット会場にて配布の予定で、7月にはコンテンツを確定。
第8回	6月16日	6名 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・コンテンツの仕上げ 2テーマは取材に基づいて記事内容を再構成(野路、楠本) 1テーマ(山崎)はインタビューの準備 ・(D)より記事作成時のポイントが伝授される。 ①取り入れたい内容を何個か洗い出す →②見出しだけで構成案を作成 →③物語の核となる内容を入れる →④次の展開につながるような内容を入れる。 ・3テーマ(猪原、朝原、松林)は文章の校正と方針が決定
第9回	7月 7日	7名 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー取材(2テーマ) 合唱テーマ(金原)は、human note 寺尾氏に、神戸のスポット(田村)は、洋菓子店(フロイン堂など)にロケハン、インタビュー取材することに決定。 ・グランピングテーマ(松林)は、4つの実体験で当たり前だと思い込んでいたことなどを作文し完成させる。 ・仕上げ中の4テーマは、タイトル、バナーデザインや文章の構成見直しと仕上げに取り組む。
第10回	7月29日	5名 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・記事文章の推敲とデザイナーのサポートにより、内容に沿ったバナーデザインやタイトル字体、色調などが検討された。 ・家のごはん(朝原)は震災当時炊き出しをしていた農家さんへインタビューが決定。 ・(桂)は自分が楽しいと思っていることを紐といて言葉にする。 (獅子舞、サバイバルナイフ) ・9月に向けて、タブロイド紙の準備、編集を進める。
第11回	10月23日 最終	3名	<ul style="list-style-type: none"> ・記事完成と発信状況の確認、振り返りなど 参加者からは、取材活動や専門員からのサポートにより、記事が想像以上の仕上がりになったなど喜びの感想が述べられた。 ---7頁に追加掲載

各メンバーの興味・関心事やアイデアから、プロデューサー、ディレクターのサポートのもとコンセプト作りがなされ、学生が書き出し原稿を作成。防災・減災へアプローチや方向性が議論された。取材先は、広報広聴課や防災支援課のネットワークにより検討され、インタビュー対談を経て記事編集が進んだ。8月時点で10テーマが進行し、順次完成後にWEB掲載された。



第5回会議(4/21)



第7回会議(5/26)



第10回会議(7/29)

6. 具体的な広報活動と成果

●防災啓発動画の発信(防災動画制作チーム)

- (1) 兵庫県 ひょうごチャンネル(You Tube)にて発信 (6月)

<https://hyogo-ch.jp/video/6048/>

視聴回数 210回以上(実績)



- (2) 大学コンソーシアムひょうご神戸ホームページにて発信 (6月)

学生交流事業【"コンソ"×Channel 2 学生交流】

<https://consortium-hyogo.jp/consome/>

視聴回数 320回以上(実績)



- (3) 第22回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムにて発信(2025年8月30日・31日)

① パネル展示:「兵庫から発信する大学間連携や産官学連携」をコンセプトに、加盟校15校、23ブースで「大学間連携」「産官学連携」「震災30年、阪神・淡路大震災の教訓をつなぐ大学・学生の活動」の3つのテーマを展示。震災30年テーマにおいては、8大学と当コンソから出展があり、当コンソでは本プロジェクトの取組みを主題とし、これまでの15年間の学生ボランティア活動の歩みと共に紹介した。



震災30年 パネル展示(コンソ)

向いのブースでは、展示と共に能登半島の災害支援として特産品販売も行われ(神戸学院大学)、コアタイムには多くの来場者が足を止め、パネルを読み込みながら議論や質問が交わされた。動画を企画制作した学生(金子、武田)も積極的に説明し、参加者の関心を惹きつけていました。(上の写真参照)

☆研究交流フォーラムの報告書(note記事)を参照ください。
<https://note.com/consohyogo/n/nd705a8f433be>



② 分科会:【TKK3 大学連携事業 15 周年企画】阪神・淡路大震災から 30 年

「若者と考える 被災地支援と語り継ぎのチカラ」

この分科会では、防災・減災・ボランティアを中心とした社会貢献教育の取り組みが紹介され、TKK(東北福祉大学、工学院大学、神戸学院大学)3大学に加えて金沢大学、熊本学園大学から1名ずつ、計5名の学生がそれぞれの活動を発表した。意見交換では、学生の活動参加の意義や期待、大学の支援方法、教育へのつなげ方が議論され、アンケートでは他大学との連携や学生の実際の活動報告が業務・学生支援に有益であった、加盟校に働きかけて活動参加を促したいなどの声があった。

また、昨年のプロジェクトで、防災動画を制作した学生(濱崎)が参加者にその内容を説明。改めて原点に目を向け、その経験からの学びや教訓を伝える重要性や、災害時の女性や障がい者の困難への理解、また海外へ向けて発信する意義を訴えた。

次回につなぐとは未来に託す希望であり、学生のこのような自発的な啓発活動やボランティア支援実績は頼もしく、明るい希望につながった。彼らの活動を支援する経済的、組織的な仕組みづくりも今後重要との意見があった。



活動の発表と議論



学生メッセージと動画の上映

(4) 兵庫県 創造的復興サミット (2025年9月20日開催、ポートピアホテル)

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk41/sozotekifukko-summit.html>



ひょうご EXPO ウィークの一つとして「災害からの創造的復興」をテーマとした創造的復興ウィークが展開され、その中核となるイベントとして、被災地の知事や海外の自治体・関係機関などが一堂に会し、共同宣言をとりまとめて創造的復興の理念を国内外に発信する「創造的復興サミット」が9月20日に開催された。阪神・淡路で生まれたコンセプト「創造的復興」をテーマに意見交換されたその会場で防災動画が紹介された。(危機管理部)



サミット会場での上映

(5) 大阪・関西万博会場 関西パビリオン 兵庫県ゾーン

9月15日～19日の間、兵庫県ゾーンにおいて、未来バスシアターへのコリドーで防災動画をモニター上映し、来場者へ広く紹介された。(危機管理部) また、7月26～27日には、ひょうご楽市楽座会場(尼崎フェニックス事業用地)でも活動が紹介された。

●WEB メディアの取材・編集 (リメンバー117チーム)

2月末から活動を開始し、テーマを考える時期には、(1)兵庫県の広報誌(編集部門)から参加学生が取材を受け記事として発信された。その後、テーマごとに方向性や文章構成、取材先なども決定。気づきや学びの多い取材や編集作業を経て、学生とチームメンバーにより完成した記事は、下記(2)のサイトに順次掲載され、9月には纏めたものが(3)タブロイド紙として配布された。

(1) 若い世代が伝える震災の記憶 (兵庫県広報誌「県民だより」5月号)

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk03/dayori2505/pickup10.html>



学生(山崎)がプロジェクトに参加したきっかけ、考えや抱負を語る。

(2) 阪神・淡路大震災30年 リメンバー117サイト(コンテンツ掲載)

完成した記事は、随時この特設サイトに掲載、発信された。



僕たちの目で、僕たちの言葉で「あの日」を考える。「これから」を考える。

<https://tsunagul117.jp/remember117/info/about-117/>

(3) タブロイド紙発行 (2025年9月) ---次頁参照

大阪・関西万博会場にて約250部、創造的復興サミット会場においても配布され、若者の言葉が多くの人々に届けられた。

●最終会議での振り返り(10月23日)

・取材先の農家の方とは祖母と孫のような和やかな雰囲気となり、記事は想像を超える出来映えとなつた。震災時の支援行動(語り)に感銘し、私も災害時には炊き出しをしたいと思った。(朝原)

・取材した たつの市役所職員の方々は熱心で、防災意識もとても高いと感じたし自分も楽しかつた。お父さんが記事を読んで感動してくれた。(楠本)

・こんな良い記事になるとは思っていなかった。グランピングには心の準備もそれほどなく行ったが、被災時にはこうなるのかと、当たり前でない体験ができた。タブロイドをもっとたくさん配布したい。(松林)



リメンバー117サイト画面と共に記念撮影

ほうしゃのう女 | 生子達矢

小学二年生の秋、一人の女の子が僕のクラスに転校してきた。彼女は折り紙がとても上手で、当時折り紙が大好きだった僕に、色々な折り方を教えてくれた。しかし、彼女がどこから来たのかは誰も知らなかった。自己紹介のとき、先生も彼女自身も、それには一切触れなかったからだ。

それから三ヶ月が過ぎ、クリスマスが近づいたある日、彼女の靴がゴミ箱に捨てられているのが見つかった。クラスでは学級会が開かれ、誰がそんなひどいことをしたのか話し合った。たしか、五時間目が終わったあと、日が沈むまで続いたと記憶している。彼女は明るく、優しい子だった。いじめられる理由なんて、僕には思い当たらなかった。

しかし、翌朝——終業式の日、彼女の机に「放射能女」という落書きがされていた。その文字を見た瞬間の衝撃を、僕は今でもはっきりと覚えている。

クラスの誰かが、落書きを見て笑った。「放射能がつる人ってほんまに光るんやう?」——悪ふざけと無邪気な残酷さが混ざった、子ども特有の笑い声が広がる。その瞬間、クラスの空気は決まった。彼女は「そういう存在」として扱われるようになった。

冬休みが明けたある朝、彼女が折った美しい折り紙が、あの落書きとともにゴミ箱に捨てられていた。その日の放課後、僕は彼女が福島から引っ越してきたのだと知った。そう——彼女は、あの原発事故のあった福島から来た子だったのである。

彼女は全てを失ってやって来たのではなかったのだろうかと、今になってふと思う。

震災の日、彼女は家を失い、学校を失い、大切な友達や、もしかすると家族すらも失ったかもしれない。突然奪われた日常。すべてが津波に飲み込まれ、放射能という見えない恐怖が街を覆った。避難所での日々を経て、新しい土地で、新しい生活を始めようとした——そこのはずだったのではないか。

けれど、新天地で彼女を待っていたのは、新しい希望ではなく、新たな苦しみだった。

「放射能女」

そのたった四文字が、彼女のすべてを否定した。過去も、現在も、未来も。まるで、ここにいてはいけないとでも言うように。

彼女が福島から来たことを知った瞬間、僕の心に言いうの不安が広がった。「放射能」という言葉が、子どもながら見えない脅威のように思えたのだ。もし彼女と一緒にいることで、自分で「汚染された」と思われたら——そんな漠然とした恐怖に駆られ、僕は少しずつ、彼女と距離を置くようになった。

彼女へのいじめは次第にエスカレートしていった。机には何度も「放射能女」と書かれ、消しても、机を取り替えても、また繰り返された。それでも僕は、何も言えなかった。もし彼女をかばえば、次は自分が標的になるかもしれない。そんな思いが、僕を黙らせた。

ある日、彼女の筆箱が開けられ、消しゴムや鉛筆が床にぶちまけられていた。それを見つけた誰かが言った。「これ、拾ったらヤバくない?」まるでそれに触れることで、自分で「汚染」されるかのように。皆、遠巻きに見ながら、誰も拾おうとはしなかった。僕も——彼女自身でさえも。

彼女は、その場でただ立ち尽くしていた。表情はあまり覚えていない。

そして二ヶ月後、彼女はまた転校していった。理由は分からぬ。家の都合だったのかもしれないし、あるいは——。けれど、今になって思う。彼女を本当に苦しめたのは、あの落書きを書いた誰かだけではなかった。何もせず、ただ見ているだけだった僕もまた、加害者の一人だったのかもしれない、と。

◀WEB掲載ページはこちら


グランピングの4つの実体験

「当たり前」だと思い込んでいたかもしれないこと | 松林勇希

2025年2月、高校の同級生2人と滋賀県高島市へグランピングへ行った。道中は山手線ゲームをして、楽しむ間に到着するぐらいだった。私を含めみんな楽しんでいたあの時間が今も脳裏に焼き付いている。さて、ここでは、普段直面するがほとんどない体験をした。そこで、自分のグランピングで何があったかを思い出し、「当たり前じゃなかったかもしれないこと」を書き出してみることにした。



一緒にいる人を選べることは「贅沢」である?

6分でシャワーを浴びられる?できる?できない?

エアコンがぶっ壊れた?どうする?それとも...?

SNSは案外なくても過ごせる?それとも...?

◀記事全文
はこちら


僕たちの言葉で「あの日」を考える。「これから」を考える。

リメンバー
117 プロジェクト
阪神・淡路大震災30年

阪神・淡路大震災を経験したことのない若者たちが「あの日」と「これから」を考えるプロジェクト

大怪我をして痛みと孤独を味わった。
就活で大きな不安を抱えた。
そんなときに地震があつたらどうなつてしまふのだろう。
——山崎天智



たくさんの異文化が集まる神戸が好き。
何があっても生業や文化を守ってきた職人さんの話を聞きたい。
——田村笑梨



視覚障がい者の祖父と祖母。もしも、地震があつたなら、初めて考えた障がい者の支援。
——楠本明日香



ずっと合唱をやってきた私。
音楽の力で人を救えるなら。
——金原美薺



「当たり前」だとと思っていたこと。けつこうたくさんあった。
「当たり前」。気がついた僕のグランピング旅行で当た
——松林勇希

「ほうしゃのう女」と机に書かれた小学生の時の転校生の彼女について。
——生子達矢

母と祖母のつくったご飯が大好き。
避難所の炊き出しをしていた方はどんな気持ちだったんだろう。
——朝原令



ABOUT | リメンバー 117 について

リメンバー117は阪神・淡路大震災を経験したことのない若者たちによる、阪神・淡路大震災WEBメディアプロジェクトです。震災25年の時にプロジェクトが始動し、30年を迎えた2025年に再始動。生まれる前の出来事を、自分たちなりに頭と体と心を使って考え、記事を書いています。

チーム・リメンバー 117

【取材チーム】
朝原 令 | 猪原 静 | 大島 かれん | 桂 光輝 |
金原 美薺 | 楠本 明日香 | 生子 達矢 | 田村 笑梨 |
野路 美緑 | 濱崎 亮太 | 松林 勇希 | 山崎 天智

【サポート】
有田 佳浩 (兵庫県広報プロデューサー)
桂 知秋 (兵庫県メディアディレクター)
福島 由衣 (兵庫県メディアディレクター)
加悦 竜馬 (兵庫県防災支援課)
北野 隼也斗 (兵庫県防災支援課)
満尾 遼太郎 (兵庫県防災支援課)
渡辺 顕
鶴留 彩花

事務局・お問い合わせ

ひょうご安全の日推進県民会議事務局
(兵庫県危機管理部防災支援課内)
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL : 078-362-9062
FAX : 078-362-4459
HP : <https://19950117hyogo.jp/>
E-MAIL : bosaishien@pref.hyogo.lg.jp

一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸
〒651-0072 神戸市中央区脇浜町1-2-8
兵庫国際交流会館1F
TEL : 078-271-0233
FAX : 078-271-0244
HP : <https://consortium-hyogo.jp/>
E-MAIL : info@consortium-hyogo.jp

取材協力 (50音順・敬称略)

家 彰利、前田 ゆかり (たつの市役所)
木南 晴太 (東播磨県民局)
寺尾 仁志 (human note)
西馬 きむ子
藤本 悠輔 (神戸県民センター)

協賛

JA共済連 兵庫





野路美緑

バイトとボランティアを比べてみて気づいたこと

お金じゃない
価値って
なんだろう?

「アバイトとボランティアの違いって一体何だろう??」。

神戸ルミナリエの募金ボランティアでの経験からこの疑問を持った私。ルミナリエから半年ほど経った2025年6月、募金ボランティアのサポートをしてくださっていた県庁職員の藤本さんと久しぶりに会って、「アバイトとボランティアの違い」について話し合いました。

他にもこんな記事を制作中です!

WEB「リメンバ117」

でお読みください。



ずっと合唱をやってきた私。音楽の力で人を救えるなら。

金原美薫

音楽の力ってすごい。でも、音楽は人を救えるのだろうか? 歌で震災の記憶を繋いでいくことはできる?



異文化が集まる神戸が好き。生業や文化を守ってきた職人さんの話を聞きたい。

田村笑梨

神戸にはいろいろな異文化が残っている。職人さんたちは、震災当時どうしていたのだろう? 被害にもくじけず文化を守ってきた人たちにお話を聞いてみたくて、まずは神戸の老舗を巡っています。



自己犠牲と思ってボランティアしたことはない

私はにとってはどちらも楽しくて、そんなに違いが分からない……。そう話してみると、藤本さんは「お金以上に価値があるものを見つけられるのが、ボランティアなんじゃないかな」と答えてくださいました。

私は現在、就職活動中です。面接でボランティアをしていました、というと「意識高いね」とか、「そんなに自分を削らなくていいのに」と言われたことがあります。でも、自分ではそうでもないのに、と思っていました。はたから見たら「意識高い」と思われるのかもしれません私がとしては自分が楽しくてやっていること。ルミナリエも寒かったけど、楽しかったんです。(中略)とはいって、自分がいいことだと思っていることが相手にとってもそうとは限らないですね。特に災害ボランティアなどでは、他所者が何しに来たんだ!と怒られてしまうことも少なくないです。

藤本さん「そういう怒られるリスクもあるからこそ、ボランティアは自己犠牲ではやりたくないという気持ちはあるよね。自己犠牲の精神でやっていて怒られたらなんで?という気持ちになってしまう。

たとえば道にゴミが落ちていて、汚いなど感じて拾って帰る行為は、自分がしたいからやっただけというか。個人的にゴミ拾いとか人助けとかをやって、別にやってくれなくてよかったのに、と言わってもそれはそれで仕方ないかなと。(中略)

私も相手の受け取り方は相手に任せたスタンスです。ただ、自分に余裕がないと、「やってあげてる」という感覚になってしまうこともあります。もしかしたら、詰め込みすぎずに余裕を持つことが、ボランティア活動をする上で最も大切なかもしれません。改めて考えました。

リメンバ117では、「あの日」を知らない私たち世代が、自分たちなりに頭と身体と心を使って考えて、記事をつくっています。

たとえばこんなふうに。
朝原令の場合

リメンバ117では、「あの日」を知らない私たち世代が、自分たちなりに頭と身体と心を使って考えて、記事をつくっています。

誰ひとり取り残さない避難を目指して

災害時、障がいを持つ方をどう助けるか。たつの市役所に聞く | 楠本明日香

地震が起きた時、自分なら何をするだろう? (中略) そういえば、祖父と祖母は目が見えないって父が言っていたな。障がい者は災害が起きた時、どうなるのだろう。私はどうやって助けてあげられるのだろう。この取材はそんな思いから始まった。今回は兵庫県たつの市役所危機管理課の家さん、福祉課の前田さんに取材させていただいた。

「気が引けるから、地域の支援者にはよう声かけられへん」~避難計画と地域のつながりの希薄化~

(中略) 兵庫県たつの市では、「登録台帳」というものが要支援者1人1人に対して作られている。簡単に言うと、「登録台帳」には緊急連絡先やその人独自の避難計画、災害時に支援してくれる人の情報などが載っている。障がいは1人1人違ってそれぞれが求める支援の形は様々である。「登録台帳」は個々に寄り添ってくれているのだと私は感じた。

だが、同時に現場では、上手くいかないこともあるようだった。「登録台帳」では、要支援者にそれぞれ「地域支援者」と呼ばれる人を少なくとも1人は登録することになっている。災害時に避難をサポートしてくれる役割の人だ。私はふと、自分が要支援者になったとしたら誰に地域支援者になってもらうんだろうとおもった。この春に引っ越ししてきたばかりのマンションには気を遣わず頼れる人がいない。それどころか名前すら知らない人ばかりだ。そんな人に地域支援者になってほしいと頼める勇気が私ではない。前田さんも、「地域コミュニティの希薄化が進んでいて、障がいを持つ方が遠慮がちになり苦慮している」と話してくれた。コミュニティがよく形成されている地域であれば、「私が地域支援者になってあげるよ」と積極的な声掛けがありそれがスムーズに受け入れられやすい一方で、あまり地域のつながりがないところでは、「気が引けるから、地域の支援者にはよう声かけられへん」

「誰に頼めばいいかわからへん」と言って、要支援者が遠慮するケースも多いらしい。「何かがあったときは地域ぐるみで助け合ってくださいね」ということをお話しすると、いや、じゃあもういいわってなっちゃうんで、そこがもどかしくて」と前田さんはそう本音をこぼしていた。

地道に、ちょっとずつでも。
~遠慮から生まれる、要支援者とのすれ違いを埋めていく~

(中略) 現状、行政が努力をしても、「登録台帳」の勧めを断る人は多いそうだ。「自分の情報を教えてたくない」、「立ち入ってほしくない」、断られる理由は山ほどある。でも、災害が起こったら、遠慮なんて言つていいらないと私は思う。前田さん・家さんや市民委員さんが日々感じるもどかしさと、要支援の方々が抱える思い、それをひとつひとつ紐解くためにみなさんが積み重ねていく頑張りを、話を聞きながら感じた。



◀記事全文はこちら



◀取材前に、視覚障がい者の祖父母について父に聞いてみた話はこちら



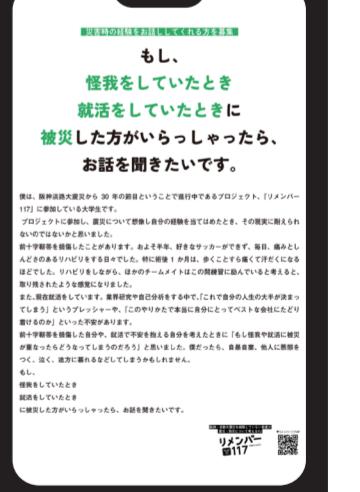
そういうふうに山崎さんみたいに考えるか、私みたいに考えるかっていうのは、ほんま紙一重やと思う。やっぱり、どうせ生きてんやつたら、楽しく生きた方がいい」と話されました。

木南さんは「ずっと登山をしてきた自分には山登りっていう軸があるとは思います。自分の人生において。それがつらい時の逃げ場にもなるし。なんか一本足より二本足で立ってるっていう強さがありました。一番悩んだ就職1、2年目は、一番山登りをした時期もあります」とおっしゃっていました。

被災してショックを受けたり、就活で不安を感じることは、やはり避けられないことだと思います。しかし取材をして、周りとのつながりや、自分の軸を意識することで、そうした精神的負担はやわらぎ、前向きに生きられるのではないかと感じました。私が前十字靭帯を損傷して、なかなか立ち直れなかったこと、就活に不安を感じることは、共通した要因があると考えます。まず、「自分でふさぎ込んでしまったこと」。そして、「軸を見失ったこと」です。負傷では軸の「サッカー」ができなくなつたこと、就活では選択肢の多さが原因で、やりたいことの軸を見失いました。

もし私が被災しても、周りとのつながりを意識して、辛い時もよりどころになる「自分の人生の軸」を見失わぬことで、木南さんのように前向きに生きようと思います。

取材対象者を求めたXの投稿。



「どうせ生きてんやつたら、楽しく生きた方がいい」

被災、留年、就職を立て続けに経験した方に取材して、学べたこと | 山崎天智

私は、去年の夏に前十字靭帯を損傷し、好きなサッカーが半年間出来なかった経験があります。また、現在就活中で、人生の岐路に立たされているといった漠然としたプレッシャーを感じています。これらの経験に被災が重なったら、自分だったら耐えられないと思いました。実際に被災時に、負傷中または就活中だった方ははどうだったんだろう。話を聞いてみたいと探していたところ、東播磨県民局副局長の木南さんが快諾してくださいました。

辛いことがあっても人生を楽しむための、考え方と軸

大学4年生の時に阪神・淡路大震災に遭った木南さんは、被災直後の3月に留年が決まって大学院進学を断念し、急遽就職活動をすることになったそうです。(中略) 被災、留年、就職。私が同じ立場なら、凹んで立ち直れないと思うのですが、なぜ落ち込まずにいられるのですか、と木南さんに聞いてみました。すると木南さんは、「なんか考え方一つやな。

震災当时、避難行動をはじめとした農家の行動を食べること、助け合うことのあたたかさと難しさについて語り合いました。

出来上がった記事はこちら



たとえばこんなふうに。
朝原令の場合

リメンバ117では、「あの日」を知らない私たち世代が、自分たちなりに頭と身体と心を使って考えて、記事をつくっています。

5月

まずは自分の興味・関心を考える。家で食べることが大好き。だからこそ、被災時のご飯について考えることに。



6月

「自分ごと」をとことん深堀り。母と祖母がつくる料理への愛をエッセイに。記事▶

7月

エッセイ完成。振り返りした「食べることへの愛」を手に取材を企画。



8月

震災当时、避難行動をはじめとした農家の行動を食べること、助け合うことのあたたかさと難しさについて語り合いました。

出来上がった記事はこちら



入場無料

Shin Kids festival

シンキッズフェスティバル

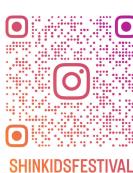
・10月13日(月・祝)
12:00~15:00

「シンキッズフェスティバル」は、兵庫県下の大学と連携して活動している
大学コンソーシアムひょうご神戸がINAC神戸レオネッサと共に共催し、
学生が会場を盛り上げるブースやイベントを企画・運営する取り組みです。
幼児教育に関わる仕事を目指す学生や、スポーツに関心のある学生が中心となり、
幅広い年齢層の来場者に楽しんでいただけるブースを多数展開します。



INAC KOBE
SINCE 2001

くわしくはコチラ



場所: ノエビアスタジアム神戸
芝生広場・ときわんノエスタ

【イベントMAP】



Event Highlights

マスコットにも
会えるかも♪



子育て支援センター
「ときわんノエスタ」休憩所
(キッズスペース・授乳室あり)
ブースもあるよ!
フェイスペイント・耳つぼマッ
サージ、食育ブース

★スタンプラリー★
「芝生広場」と「ときわん」のブースを
まわってスタンプを集めよう!
スタンプの数でINACグッズ
がもらえる!

キッチンカー
も来るよ!

ブースで遊ぶと
INAC無料観戦チケット
がもらえる!
先着200名

★大学生による 楽しいブース(無料)★

- ・キックターゲット
- ・サッカー応援グッズづくり
- ・INACフォトブース
- ・アロマキャンドルすくい
- ・背番号を釣ってステッカーゲット!
- ほか 全15ブース



INAC神戸レオネッサ × 大学コンソーシアムひょうご神戸 共催

県下すべての大学によるすべての大学のための

一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸

〒651-0072 兵庫県神戸市中央区脇浜町1丁目2-8 兵庫国際交流会館 1F

TEL 078-271-0233

Fax 078-271-0244

Email info@consortium-hyogo.jp

HP https://consortium-hyogo.jp/



芝生広場



ときわんノエスタ



ブースを回って
スタンプラリーに参加しよう！
INAC選手のサイン色紙や
今シーズンペアチケットがもらえる！

- ① キックターゲット (関西国際大学)
- ② ネパール！リフティング王決定戦！ (関西学院大学)
- ③ 世界にひとつ！ネパールビーズとピース！ (関西学院大学)
- ④ アロマキャンドルすくい (兵庫大学)
- ⑤ わくわくどきどき！人間スロットマシーン (兵庫大学)
- ⑥ サッカー応援！ふうせん太鼓 (兵庫大学)
- ⑦ うごく！つくる！こどもひろば (甲南女子大学)
- ⑧ わなげ (流通科学大学)
- ⑨ YAPPYアクティブ・キッズ・フィットネス (神戸市外国語大学
兵庫体育・スポーツ科学学会)
- ⑩ Fishing field～ステッカーをゲットしよう！～ (兵庫県立大学)
- ⑪ INAC選手と写真を撮ろう (大手前大学、大手前短期大学
関西国際大学)
- ⑫ 耳つぼマッサージ (神戸常盤大学)
- ⑬ フェイスペインティング (神戸常盤大学)
- ⑭ ぶちぶちもち麦の小人たち (神戸学院大学)
- ⑮ 宍粟かきもちパーク (神戸学院大学)

無料で遊べる！ 全15ブース

シン キッズフェスティバル 2025 報告書

主催：大学コンソーシアムひょうご神戸、INAC 神戸レオネッサ

1. 日時：2025年10月13日（月・祝）12:00～15:00
2. 場所：ノエビアスタジアム神戸
芝生広場および神戸常盤大学子育て支援センター「ときわんノエスタ」
3. 対象：児童等とその家族、試合観戦者
4. 参加者：総計 504名
学生…14校 65名（うち加盟校校 13名・非加盟校 1校 2名）
(内訳) 関西学院大学 9、大手前大学 2、大手前短期大学 1、関西国際大学 7、神戸大学 1、神戸国際大学 1、兵庫県立大学 3、神戸常盤大学 1、神戸学院大学 12、神戸市外国語大学 5、流通科学大学 4、甲南女子大学 4、兵庫大学 13、武庫川女子大学 2)
大学・職員…6校 7名
(内訳) 神戸学院大学 2、流通科学大学 1、甲南女子大学 1、神戸市外国語大学 1、兵庫大学 1、神戸常盤大学 1)
企業…2社 9名、一般…2名
来場者 417名（内訳）大人 220名・子供 197名
※事務局：大学コンソーシアムひょうご神戸 4名
5. 開催趣旨
本事業は、大学コンソーシアムひょうご神戸の加盟校学生が、INAC 神戸レオネッサのホームゲームに合わせて「シン キッズフェスティバル」を開催し、企画・広報・運営等の実践的な学びの機会を得ることを目的とする。
将来、幼児教育・保育分野を志す学生には子どもや保護者とのふれあいを、スポーツビジネスや広報、イベント企画に関心を持つ学生には INAC 神戸レオネッサでの職場体験や他大学の学生との協働を通じて、現場に即したスキル習得やキャリア形成の機会を提供する。また、INAC 神戸レオネッサが抱える試合の集客課題に対し、学生が新たな観客層（特に家族連れ）の来場促進に取り組むことで、地域のにぎわい創出・活性化にも寄与することを目指す。
<経緯> 2015年～2021年に「キッズフェスティバル」をこべっこランドにて実施していたが、施設移転に伴い貸館が停止となり、従来の形での開催が困難となった。そこで、贊助会員企業である大栄環境（INAC 神戸レオネッサの母体企業）の協力を得て、新たな会場としてホームゲーム会場を活用し、継続開催が可能となった。

7. 学生の活動（内容詳細）

■学生スポーツプロモーター（9大学 15名が活動）

INAC 神戸での職場体験を通じ、試合開催に必要な企画・広報・運営やイベントに携わるスタッフ

（関西学院大学(1)・大手前大学(2)・大手前短期大学(1)・関西国際大学(3)・神戸大学(1)・神戸国際大学(1)
兵庫県立大学(3)・神戸常盤大学(1)・加盟校外大学(2)）

<活動実施日：全 13回>

- ・7月18日：INAC 神戸シーズンイン記者会見
- ・7月19日：INAC 神戸開幕レセプション
- ・8月23日：ホームゲーム見学
- ・9月25日：KISS FM ラジオ広報
- ・8月7日、9月16日：キッズサポーターとのミーティング
- ・8月27日、9月30日、10月6日、10月7日：イベントブース会議
- ・9月6日、9月21日：INAC 神戸でのボランティア活動
- ・10月13日：シン キッズフェスティバル当日（学生スポーツプロモーター・ブース等）

■キッズサポーター (13 大学・15 ブース実施)

試合開催日のブース運営・実施を担うスタッフ

<p>① 関西学院大学 CLUB GEORDIE ～ネパール！リフティング王決定戦！～</p> <p>ネパールへの支援活動を実施している CLUB GEORDIE は、ネパールを身近に感じてもらうためにネパールの遊び「チュンギ」を紹介。「チュンギ」は、輪ゴムを繋げて作るゴムボールを使用し、ネパール版リフティング行うゲーム。</p> 	<p>② 関西学院大学 CLUB GEORDIE ～世界にひとつ！ネパールビーズとピース！～</p> <p>ネパールビーズを使ってブレスレットをその場で手作り。各自の腕の大きさに合わせてビーズをひとつひとつ通して世界に一つの作品を作成。</p> 
<p>③ 関西国際大学 大平先生ゼミ ～キックターゲット～</p> <p>キックターゲット。サッカーゴールに的となるものを用意し、それに向かって離れた位置からボールをけり、的に当たると景品がもらえる。</p> 	<p>④ 甲南女子大学 GO!GO!わくわく隊 ～うごく！つくる！こどもひろば～</p> <p>子どもたちが楽しめる、工作とアクティビティのブース。ペットボトルのけん玉を作成したり、ペットボトルで作った「サッカーボウリング」を実施。小さなお子さんでも楽しめる内容。</p> 
<p>⑤ 兵庫大学 サプライズ企画部 ～アロマキャンドルすくい～</p> <p>学生による手作りのアロマキャンドルを見た目にも美しく、香りもよいアロマキャンドルすくい。すくえても、すくえなくても2個プレゼント。</p> 	<p>⑥ 兵庫大学 わくわくさんのポケット ～わくわくどきどき！人間スロットマシーン～</p> <p>3人がスロットの“リール”になり、仕切り付きボックス席でサッカーボールを使って回転。合図で止まったときの色の組み合わせで結果を出す。アナログの演出で結果に応じてお菓子やシールなどの景品をプレゼント。</p> 
<p>⑦ 兵庫大学 短期大学部保育科 ～サッカー応援！ふうせん太鼓～</p> <p>サッカー応援に使える太鼓作り。スタッフと一緒に工作し、好きな絵を描いて作成。手作りのばちでたたくと音が出て応援ができる。</p> 	<p>⑧ 兵庫県立大学 ～Fishing field・ステッカーをゲットしよう！～</p> <p>ユニフォーム型の的を釣り竿で釣ると、裏面に選手の背番号が書いてあり、景品としてその背番号の選手のステッカーがもらえる。INACのマークが出たら好きな選手のステッカーがもらえる。</p> 

<p>⑨ 大手前大学、大手前短期大学、関西国際大学 ～INAC 選手と写真を撮ろう！～</p> <p>選手ポスターパネルの前で小道具を持ってポーズをとり、チェキやスマホで写真を撮影。撮ったチェキにペンでイラストを描いてもらい、プレゼントする。13:30-14:00 の間には INAC の選手が登場し、一緒に記念撮影ができる。</p> 	<p>⑩ 流通科学大学 与那覇先生ゼミ ～輪投げ～</p> <p>輪投げを 1 人 3 投でき、入った点数によって景品が変わる。年齢によって難易度を変える工夫もあり。景品にお菓子を配り、入らなくても参加賞あり</p> 
<p>⑪ 神戸市外国語大学 ～兵庫体育・スポーツ科学学会 YAPPY プロジェクト YAPPY アクティブ・キッズ・フィットネス～</p> <p>中国人留学生と一緒に、常行研究室 YAPPY で開発したユニバーサルフィットネスを体験できる。子どもだけでなく、障害のある方や高齢者、体力の低い方々にも楽しめるアクティブエイジングプログラム。</p> 	<p>⑫ 神戸学院大学 藤原先生ゼミ ～ぱちぱち もち麦の小人たち～</p> <p>企業課題解決プログラムの一環として、マルヤナギが提供している、加東市で栽培から商品化まで行われている兵庫県産もち麦の「キラリモチ」という品種の普及活動を実施。学生がトッピングで子供にも食べやすい工夫考え、試食を提供。食についてのクイズも行い、もち麦のおいしさの体験に加え、健康食材としての普及を目指した課題解決の実践と検証も実施。</p> 
<p>⑬ 神戸学院大学 石賀先生ゼミ ～宍粟かきもちパーク～</p> <p>企業課題解決プログラムの一環として、宍粟市の観光促進のため、宍粟市の特産品かきもちの試食を学生のアイデアによるさまざまなトッピングと共に味わう。宍粟市の観光についてのアンケートと食についての展示も実施。かきもちが若年層にも親しまれるよう、学生のアイデアによるさまざまなトッピングで試食を実施し、課題解決の実践と検証の場となる。</p> 	<p>⑭ 神戸常盤大学 ～耳つぼマッサージ～</p> <p>学生のアイデアで、ときわんノエスターの職員の方と子供が遊んでいる間に、お母さんやお父さんの日ごろの疲れを耳つぼマッサージで癒せるブースを提供。プロの施術でリラックスしてもらえる。</p> 
<p>⑮ 神戸常盤大学 ～フェイスペインティング～</p> <p>学生のアイデアで、子供達がフェスティバルをもっと楽しめる工夫を考え、フェイスペイントで会場に華やぎを添えるプロの施術を提供。当日は約 100 名が体験。</p> 	

8. 参加者の感想

・スポーツプロモーターを通じて、大学も学年も違うけれど、同じことに興味を持っている人達と関わることができとても良い経験になりました。短期間でどうすれば来場者を増やせるかを考えることや、どんなブースを作つていけばいいかを考えることは難しかったですが、一緒に参加した方々と色々考えて準備をして本番までを過ごすことができ、とても楽しかったです。（兵庫県立大学 1年）

・INAC の観客を学生の力でどう増やし、魅力を伝えていけるかを考えていきイベントの運営を行った。

最初は自分たちの力だけで不安なことは多かったが、INAC の試合をスタジアムで観戦し、どういう客層で、どういうものに魅力を感じてもらえるのかなどをみんなで考えていき、みんなのベクトルが一緒になり、チームのみんなと協力してできた。自分たち 3回生の代はコロナで文化祭など高校生時にイベントが 100%できなかつたので、このようなイベントで高校生の時のようなワクワクする気持ちになった。年齢も出身地もみんな違うなか、学生には大きなパワーがあると感じた。チームのみんなと仲良くなり、早く、意見を遠慮せずに言えることが最大の武器だと感じました。

この経験を通して、学生時代とは違う様々な年代の方々やたくさんの人とコミュニケーションをとることで自分とは違う意見を聞き、新しいものを吸収しようとして行動範囲も広がり、よりよい学生生活を過ごすことができると思えた。（大手前大学 3年）

・コンソの皆さんサポートのおかげで、安心して楽しく活動できました！来場者はもちろん、INAC の選手やスタッフの方々の笑顔を間近で見られて、「やって良かった」と心から思いました。学生プロモーター達もそれぞれ個性が豊かで、チームで動くことの面白さを改めて感じました。（神戸大学 4年）

9. 考察等

○学生スポーツプロモーターの活動

学生スポーツプロモーター（9大学 15名）は、7月中旬より活動を開始し、月数回のミーティングや試合会場での実地活動を通じて、INAC 神戸レオネッサの学生ボランティアとして運営に参加。スポーツビジネスやイベント運営の実践を多角的に学ぶとともに、他大学学生との交流の場としても機能した。活動期間は数ヶ月にわたつたが、学生は当日まで高い意欲を持って主体的に取り組んでいた。

○キッズサポーターの活動

キッズサポーターはゼミ・サークル単位で参加し、各自でブース内容を企画・準備した。事前打ち合わせを実施し、必要物品の作成・購入を進めるなど、実施体制を整えた。当日は 13 大学による 15 ブースが出展され、学生の発想を活かした多様な企画が展開された。

○シン キッズフェスティバル当日の様子

当日は約 500 名がノエビアスタジアム神戸に来場。学生スポーツプロモーターは受付・呼び込み・試合設営等を担当し、キッズサポーターは各ブースの運営を担った。スタンプラリーも実施し、選手サイン色紙やペアチケット等を景品としたことで、イベント全体の満足度向上につながった。

○「企業課題解決プログラム」との連動

神戸学院大学の 2 ゼミが企業と連携してブースを設置し、試食提供やアンケートを通じて地域企業の魅力を発信した。研究成果の実践・検証の場としても有効であり、地域住民と企業の接点創出に寄与。

●課題と今後の展望

- ・ 学生スポーツプロモーターの募集を早期化し、準備期間と INAC 神戸レオネッサとの関わりを十分に確保することで、課題への理解が深まり、学生がより主体的かつ実践的に取り組めるようになると考える。
- ・ キッズサポーターは募集時期に問題はなかったが、一部大学の文化祭と日程が重なったため、次年度以降は開催時期の調整が望まれる。
- ・ 今後も INAC 神戸レオネッサと連携し、学生がスポーツビジネスの現場を継続的に体験できる機会を提供するとともに、地域の魅力向上・活性化に貢献するイベントとして発展を図る。

以上